



## ビットコイン その3

だからこそ、有事に経済を制御する中央銀行のような公共機関が絶対に必要なのです。しかし、そもそもビットコインの基本思想は自由放任主義で、だからこそ個人の匿名性を保護できるネット上での分散管理技術（ブロックチェーン）を導入したのです。『中央』を排除するために生まれたビットコインは、まさに『中央』を持たないがために、仮に貨幣として流通したとしても必ず滅びます。もちろん貨幣になる前に滅びる可能性ははるかに高いですが。私はビットコインの設計者としてのナカモトサトシは尊敬していますが、残念ながら貨幣の本質を十分には理解していなかった」

——各国の中央銀行は、ビットコイン技術を応用した公的なデジタル通貨の研究に取り組んでいます。国境を超えた世界通貨が生まれる可能性はないのでしょうか。

「今はドルが世界経済の主役ですが、私是一国の通貨が世界の基軸通貨でもある仕組みは、基本的に不安定だと考えています。もし、米国中心主義のトランプ政権下で米国の中央銀行が内向きな金融政策をとり続けると、ドルが信頼をなくし、基軸通貨の地位を失う危機が来るかもしれません。その緊急事態の中で新たな基軸通貨が生まれるとしたら、世界銀行的な『中央』によって管理されるデジタル通貨である可能性が高い。紙幣を新たに刷る時間がないからです。だから、ビットコインの技術を生かしつつ自由放任主義的な思想は補正して、より効率的に『中央』が管理するデジタル通貨の研究は、次の時代の予行演習になっていると思います」

——「中央」がデジタル通貨を持つと、売り買いを把握される監視社会になる懸念があります。

「確かに、ビットコイン的な技術は両刃の剣です。今は個人の匿名性を守る構造ですが、少し設計を変えれば、作家ジョージ・オーウェルが『一九八四年』

で描いたように、『中央』が全ての取引を把握できる超管理社会の道具としても使えるようになる。ところが市場経済、そして民主主義的な社会がうまく機能するには、個人の自由が確保されなければならない。そのためには例えば複数の機関が役割分担して分権的な形を取りつつ、かつ全体の供給量は調節する、そんな匿名性と安定性を両立できる仕組みが望ましい。それがうまくいかないなら、現在の通貨のままの方がいいかもしれません。自由放任主義のビットコインがだめだからといって、次は『中央』によるデジタル通貨だと、極端に振れる必要はありません」

——ビットコインの技術がきっかけで、私たちが自由にするものだったはずの貨幣に、逆に束縛されるようになるなら皮肉的です。

「マルクスが『急進的平等主義者』と呼んだように、貨幣は人間に『自由』を与えました。人間は貨幣さえ持っていれば、共同体的な束縛から解放され、身分や性別や人種を超えてだれとでも取引できるからです。もちろん、不平等も生み出しましたが、それは量的な差異であって質的な差別ではない。だが、貨幣を使う経済は本質的に不安定で、安定性のために公共機関を絶対に必要とします。自由と安定性、個人と公共性のバランスを、どこに置くのか。個人が完全に匿名となる自由放任主義的な貨幣経済を演じようとしたビットコインの劇場は、そのような根源的な問題を、私たちに考えさせてくれているのかもしれません」

\*

貨幣の本質に迫る論であるから、まだまだ理解できないところもあるだろう。そういう所を意識しておいて、ぜひ3年生の「政経」の学習の中で解決して欲しい。